



八千代市郷土歴史研究会

会長 村田一男

事務局 八千代市勝田台 3-24-10 牧野方

=お知らせ=

8 月 23 日(日) 8 月例会

- ・午後 1 時～4 時 八千代市立郷土博物館
- ・情報交換、打合せ

9 月 19 日(土) 拡大役員会 & 例会

- ・場所は午前・午後とも八千代市立郷土博物館

・午前 10 時～12 時 拡大役員会

今後の会運営などについて

・午後 1 時～4 時 例会

史談八千代」34 号の概要紹介

三山七年祭りのビデオ上映

会員は全員ご出席ください

10 月 4 日(日) 例会

- ・午前 10 時～午後 4 時 八千代市立郷土博物館
- ・「史談八千代」34 号校正 展示作品の調整

10 月 18 日(日)～20 日(火)

丑年御縁年秋の出羽三山めぐり

集合 6:45 勝田台北口 ⇒別紙の案内を参照

10 月 28 日(水) 機関誌編集委員会

- ・午前 10 時～午後 4 時 八千代市立郷土博物館
- ・「史談八千代」34 号最終校正

11 月 14 日(土) 例会(文化祭展示準備)

- ・午前 9 時～午後 4 時 八千代市立郷土博物館
- ・文化祭展示の制作を全員で行います

11 月 21 日(土)～23 日(祝)

- ・三山の七年祭 現地取材

11 月 25 日(水) 文化祭展示準備

午後 1 時～4 時 八千代市立郷土博物館

「三山七年祭」展示写真パネルの制作

八千代市民文化祭 ふるさとの歴史展

=八千代市郷土歴史研究会 36 年の足跡=

特集：八千代八福神めぐり

と き：11 月 28 日(土) 午後 1 時～5 時

29 日(日) 午前 9 時～午後 4 時

ところ：勝田台文化プラザ 2 階展示室

設営準備は、28 日会場にて午前 9 時から開始

1989 年正月に本会が「八千代八福神めぐり」を設置して満二十年。「八福神」設置寺院と、1973 年の丑年 7 月に発足、36 年目を迎えた本会の主な研究内容を紹介します。

=報 告=

6 月 12～13 日

ときめきの二日間

研修旅行「直江兼続と良寛」に参加して

三橋 俊一

6 月 12 日(金) 晴

直江兼続と良寛を 2 日間で堪能してしまおうという、かなり欲張ったバス研修に参加させてもらった。歴史探歩は大好きなので、前々からとても楽しみにしていた。車内で隣席になった方から最近の旅の話を聞き、いろいろ教えて頂きながら目的地へ。天気も良く、爽やかな景色が車窓を走り抜けてゆく。



上杉景勝と直江兼続が少年期に学んだ雲洞庵。六地藏に迎えられ、山門へ。「雲洞庵の土踏んだか」の石畳を『石踏んだか』が正しいんじゃないの？」と冗談を言いながら、主従が学んだ部屋を皮切りに、ひと通り見て回った。宝物殿では、展示された古文書に先輩方が群がり、読み解く。掲示されていた解説書きの間違いを指摘していたが、先輩たちの解説の方が正しいことが後で調べてわかり、自分のことではないのに胸を張りたくなった。ひとりで見学すればあつという間に通り過ぎてしまうのだろうが、先輩たちの近くにいとひとつひとつが興味につながり、もっと時間がほしくなる。

次は坂戸城跡。後に兼続となる樋口与六が城下で生まれたとき、この城の城主は長尾政景。政景と仙桃院（謙信の姉）との間に生まれたのが上杉景勝。景勝・兼続主従の絆の出発点とも言うべき歴史スポットだ。こういう城跡めぐりは実に楽しい。

想像力を生かして、歴史に思いを馳せるのである。丘に登ったり藪を歩いたり、大人の少年になった気分。こんなところでビール片手に弁当を食べるのも悪くないなと思いつつ、次のスポットへ。

ミュージアム2か所。新潟県立歴史博物館と長岡市与板歴史民俗資料館。旅に行ったときにミュージアムにはあまり寄らないのだが、寄って良かったのが新潟県立歴史博物館と後に記す良寛記念館。

新潟県立歴史博物館は火焰土器の企画展を行っていたが、私はそこをほどほどにして、常設展の「縄文人の世界」と「雪とくらし」にたっぷり浸ってしまった。私の知らない世界に抵抗なく入り込ませる演出はさすが。今回のテーマとはまったく違う、言わばおまけスポット。得した感じ。

対して、長岡市与板歴史民俗資料館、愛称「兼続 お船 ミュージアム」はテーマそのもの。大河ドラマの地には、いつもこういうミュージアムが作られる。衣裳を着て撮影する部屋まで設けられていたぞ。でも、喜ぶ観光客もいるんだろう。解説時間超オーバーによって兼続の菩提寺である徳昌寺をカットせざるを得なかったのは、残念無念。解説をしてくれる人は真剣そのもので、私たちはそれを止めたくて、とは言え強引に止めるのも気が引けて、しかし時間は刻々と過ぎ、まっ

いか、それもまた心の機微。

そんな状況でも、兼続の居城であった与板城跡はカットせずに済んだ。時間を気にしながらも、ゼイゼイという元気(?) なリズムに合わせて、挑戦したメンバーは全員、頂上の詰め城へゴール。登城したコースは大手門からのコースではなく、食糧や水を運び入れる、いわば勝手口だったようだ。

この日の宿泊は「四季の宿 みのや」。いやあ、飲んだ食ったマーチ。これでもかと腹を満たす料理の数々。もう酒は一滴も入りませんと思いながら集う二次会ルーム。ところが酒というのは不思議なもので、次々とボトルが空き、酒宴は延々と続くのでした。

6月13日（土）曇

出発予定が9時なので、朝はゆっくり自分流に楽しめる。5時に起き、温泉に浸かる。湯をあがり、宿の浴衣と下駄で弥彦神社の脇の「万葉の道」を歩く。万葉集の和歌や長歌が記され、その歌にかかわる草木が植えられている。「巨勢山（こせやま）の つらつら椿つらつらに 見つつ思うな 巨勢（こせ）の春野を」という木札とともにヤブツバキが植えられ、「道野辺の うまらの末にはほほ豆の からまる君を離れか行かむ」にはヤブマメ、「吾が待ちし 秋は来りぬ然れども 萩が花ぞ 未だ咲かずける」にはヤマハギといった具合である。

カランコロン、自由に使える時間は貴重だ。カランコロン、リュックを背負った人たちと挨拶を交わす。カランコロン、ゆったりした心持ち。帰り道に弥彦神社に参拝したくなかったが、浴衣に下駄では御祭神に失礼なので一度宿に戻って出直すことに…。

越後一宮の弥彦神社。まずは御朱印をお願いしてから参拝し、左側から本殿を見たりしていたが、あとで境内マップを見て、だいぶ端折ってしまっていることに気づいた。境内マップはすでに入手していたのに、宿に置いたままで参拝したのがいけなかった。もっと気を巡らせるべきだった。後悔、先に立たず。

国上寺に到着したのは9時30分過ぎ。今日のご住職が外出しているということだが、事前に手配していた人が説明してくれた。本堂を再建した、

いわゆる中興の祖・萬元（ばんげん）上人が毎日5合の米を給されていたのが境内にある五合庵で、良寛はその後そこに住んだという。五合庵命名の主演は萬元上人だったのだ。老体でアップダウンがきつくなった良寛は晩年、麓の乙子神社社務所に移り住んだという。良寛芸術最盛期のころだ。いまの五合庵は大正時代の再建で6畳1間。もとは6畳3間だそうだ。現在の方が、庵という名にふさわしそうだ。

予定していなかった西生寺に寄る。日本最古の即身仏が鎮座する真言宗豊山派の寺だ。弘智上人が入定したのは約646年前だそうだ。嘶家みたいな口調の僧が案内と、お経をBGMにした「即身仏オープンショー」を担当してくれた。このお坊さん、兼続の前立ての「愛」は「愛染明王の愛」だと言い切っちゃうすごさ。宝物館には良寛・加藤清正・乃木希典・谷文晁などに関わるものや、雷獣のミイラ、それに槍で突かれた即身仏のレントゲン写真、槍で突いた奴の頭蓋骨などが展示されていた。すごいぞ。

最後は、出雲崎にある良寛記念館である。私は昨年、北前船の港を追う旅で新潟を巡った折、北国街道の宿場である出雲崎を歩いた。この辺りは良寛の生誕の地でもあるし、芭蕉が「荒海や 佐渡に横たふ 天の河」の句を読んだ場所でもある。昨年は良寛記念館に入らなかったのが、待ちに待ったという気持ちだ。良寛さんについて、「子供と手まり」とか「蚊を思い遣って、蚊帳から手を出して眠る」ことだけではなく、また漢詩や和歌を嗜むだけでない実生活を、家を継いだ弟をいさめる手紙などから感じる事が出来た。



ときめいた2日間。充実したときを終え、「また明日から仕事だな」と思いつつ、帰途についた。

5月17日（日）5月例会（学習会）

- ・八千代市立郷土博物館学習室にて 24名参加
- ・研究課題と担当の検討
- ・6/5の東京成徳大学特別講義「地域研究から見える八千代の歴史Ⅱ おもしろ石造物講座＝狛犬と子安塔」の案内
- ・6/12～13研修旅行 テーマ「直江兼続と良寛」行先（新潟県南魚沼・国上・出雲崎方面）の案内
- ・「郷土史研通信」66号を発行

7月2日（木）臨時の緊急役員会

10:00～12:30 八千代市立郷土博物館にて、19名が参加し、臨時に緊急役員会が行われ、「史談八千代」33号掲載記事に関して討議しました。

7月12日（日） 7月例会

- ・八千代市立郷土博物館学習室にて 26名参加
- ・課題研究の中間報告（東照寺紹介・石造物・平戸河岸・熱田神社獅子舞・屋敷氏神など）

7月30日（木） 東照寺で寺宝を拝観

午後2時から、23名が参加して東照寺（平戸）を訪問し、ご住職の好意により、寺の歴史解説、寺宝（大曼荼羅・釈迦涅槃図・高祖涅槃図など）の閲覧などを行いました。



8月5日（水）臨時の緊急役員会

13:30～16:30 サポートセンター二階にて、12名の役員が参加。

今年度の「史談八千代」と市民文化祭のテーマの変更に関して討議しました。

内容は8月例会で提案されます。

4月8日～9日

吉橋大師巡拝に参加

佐久間弘文

伝統ある高津地区長寿会有志の主催による春の吉橋大師参りが行なわれ、当会も協賛して会長以下10名が参加しました。好天に恵まれた両日、白装束の総勢は22名。



今回は高津の大師信仰の世話役であった鈴木信司氏が亡くなり、同氏の供養を兼ねた巡拝となりました。先達はいつもの吉橋春由さん、結願は第七十一番高津観音堂でした。

今年の巡拝は世話役さんの急逝のためバスの道案内が心配されましたが、当会の平塚さんが事前にルートを何度も精査して完璧なナビゲーターとなってくれました。改めて感謝です。

6月5日（金）東京成徳大学特別講義

「地域研究から見える八千代の歴史Ⅱ

おもしろ石造物講座＝狛犬と子安塔」

6月5日午後、東京成徳大学八千代キャンパス101教室にて、同大学房総地域文化研究プロジェクトの主催で、当会会員の平塚胖が「八千代市の狛犬たち」、蔵由美が「八千代とその周辺の子安塔」について講演し、多くの会員が聴講しました。



大和田新田小柴家の墓地が修復されました

畠山 隆

7月20日に板倉会員から「小柴一族の墓群が修復されている」との連絡があり、さっそく翌日佐久間会員と現地見分したところ、丁寧に修復されて整備が完了していました。

大和田新田一本松の小柴家の墓地には、元佐倉藩士の小柴宣雄の顕彰碑と、会津戊辰戦争で亡くなった長男小次郎ら小柴一族6基の墓があります。その多くは大分以前から、墓石が台座から外れ、あるいは傾いた状態になっていましたが、それが写真のように修復されたのです。

土地所有者のナカエム家にお聞きしたところ、ご本家で墓を整備された折に、日朋石材店という千葉市の石工さんが、荒れている現況を見兼ねて無償で修復を申し出たとのことでした。最近ではたいへん奇特新話であり、会にとっても喜ばしい出来事ですので、皆さんにお知らせすることにしました。



修復された小柴家の墓地（板倉さん撮影）

小柴家については、『史談八千代』31号掲載の畠山隆「佐倉藩士小柴宣雄の墓碑が語る」を参照してください。

会員訃報

本会のため、永年活躍されたお二人の会員がご逝去されました。

生前のご尽力に感謝し、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。 会長 村田一男

平野 仁蔵 会員（2009.7.9 ご逝去）

上山ひろし 会員（2009.7.19 ご逝去）

次ページに皆様からの追悼の言葉を掲載しました。

平野仁蔵さんを偲んで



2002 年 11 月郷土史展で
研究発表する平野さん

ふるき文を読みいる時に逝きし人の
ふと声ありて振り返り見る

牧野光男

平野仁蔵氏の思い出

関和時男

百賀の平野仁蔵氏を囲んで会員と共に祝ったのは、平成 19 年 4 月 15 日歴研総会の後、その 2 年後、平成 21 年 7 月 9 日、百二歳の天寿を全うされた。

現在私の頭の中で氏の思い出が走馬燈のように走り廻っている。私が平野氏と親しく面識をえたのは、歴研に入会した翌々年の八幡句額解説研究の一員として参加した郷土博の倉庫であった。氏は私より若干年令が上に見えた。が、3 年後 88 才米寿の祝いと聞いて驚いた。それほど若々しく声は朗々として弁は爽やかであった。

明治期の句額 2 枚の前に向かいあわせに座った。平野氏はこともなげに解説を始められている。

私は手にしたばかりの児玉幸多氏『くずし字解説辞典』を横に、初めて見る「くずし字」を目にして戸惑うばかりであった。

解説研究中に、氏は私にいろいろとアドバイスされた。辞典は何がよい、変体仮名の解説書も買いなさい等々。氏の懇切丁寧なご指導の下、曲がりなりに私の解説の力量も上がり、解説作業は 3 年の月日が流れ去り、八幡句額の解説が終わった。通信第 9 号平成 7 年 4 月に平野氏はそれを報告されている。

その後、氏の紹介で「千葉古文書の会」に入会した。千葉駅から椿森の市民会館まで年とは思われない豊饒たる足取りに私の方が追いかけるとい

う元気さであった。

私は 4 年ばかりで千葉古文書の会を退いたが、氏はお亡くなりになるまで席を置いておられ通夜の時、千葉古文書の会の平川氏と遭えたのも氏のお引き合わせであろう。

氏は、明治 40 年栃木県芳賀郡小貝村に生まれた。17 才の時文学好きの長兄から、本格的な日記の書き方を指導され、明治、大正、昭和、平成と計 73 冊にも及ぶ日記帳を残された。

昭和 3 年某社に就職したが病をえて退職、実家療養。また 7 年に上京したが不況にあえいだという。昭和 4 年 22 才になった平野青年は、原稿用紙に小説を書き始めたが、続かず諦めたと書き記している。その後も日記を続けられ 60 年定年退職。62 年に八千代台移住された。平成元年に当会に入会、11 年日記の会へ入会されておられる。

以上が私のまとめた略歴であるが、その中で重大な事は 73 冊の日記を公開したことである。

思い悩み決断にいたった心情は、平成 15 年 6 月 1 日『日記ろまん』に「私と日記」で述べられている。

はからずも公開された日記の一部を読む機会を与えられ、生前の氏に会えた心境であった。自筆の書体は、くずし字でしながら古文書のような文語体、熟語は難しい語句が書き連ねていて見事な文章である。

これは、後世史料として引用出来る立派な偉業と云っても過言ではない。

それにしても、この通信には、発行当時に書かれた、たった 3 編しか残されていない。当時の編集子としてなぜもっと寄稿を依頼しなかったのかと悔やまれてならない。

「五尺の身体に通う脈々の血、時に風雲を得て地上に雄飛活躍するの期も亦無きにしも非ざるなし。」氏 24 才元旦の日記の一節である。天寿を全うされた平野仁蔵氏のご冥福を唯々お祈りするのみである。

平野さんに感謝

石井尚子

郷土史研に入会した時期が同じ頃だったので、お近くしていただきました。句額の解説には、すっかりお世話になりました。

八千代台南から博物館まで自転車で往復。その

お姿を見てお伺いした折、独身で上京したころは戦後の復興期で、家庭薬の販売に毎日 50km も走り回った経験があり、自転車はお手のものとのお話。ユーモアのある独特の語り口は私の耳元に今でも聞こえてくるような気がします。

努力家の平野さん、日記を欠かさなかった平野さん。敬服の至りです。

平野さんの天晴れな往生に拍手

恵志あや

ある時、東南公共センターにて平野さんの永年の日記が展示され、夢中で読み、その内容のすばらしさ、完成度の高い文章に圧倒されました。努力は天才を生むとか、継続は力なりという言葉が頭に浮かびました。いつも平野さんの若々しい味わいのある文章も、源は永年の日記との闘いの中で培われた文章力だったなと痛感しました。

平野さんの表情には壮年の魂がそこはかなく漂っていて、柔らかい笑顔とひとみの輝きは、少ない言葉以上に多くを語っていました。人生の上面を歩んできた方ではない平野さん、毎日、日記に向かい己をふり返り、相手の心をも推量する繰り返しの中で、ご自分の心を鍛えてこられたのですね。

郷土歴史研究会の折などでも、「その分野の内容のまとめは平野さんをお願いします」というと、いつでも快く引き受けてくださいました。

平野さんは最後まで信念と自信と希望を持って生きておられましたね。その天晴れな往生に拍手を送ります。どうぞ安らかにお休みください。

上山ひろしさんを偲んで

上山さんの訃報に接して

池田弘之

7月23日に鈴木登さんと病氣見舞いに伺って、上山ひろし様が7月19日に逝去なさったという訃報に接しました。

身が少し不自由な折でも、地域の皆様と歴史、文化をともに楽しむ心をそっと教えて下さいました。忘れ得ぬことです。お身も治ったことですから、ゆっくりとお休みください。

あたたかい奥様と一生を共にできた上山さんは幸せ者ですね、と奥様にも申し上げました。



2002年11月郷土史展にて
上山ひろしさん

文学・歴史・民俗を生涯楽しんだ上山ひろしさん

村田一男

上山さんは詩人であり、いつもおもしろい詩を書いていた。著書も出された。

また歴史や民俗に親しみ、そこに昔話の片鱗があれば器用にすぐさま「民話」を創作され、まるで昔からあった歴史的な話のように語り、人々を楽しませた。

地名研究でも学際的手法を越えたユニークな発想で地名を説いてみせた。そのお力は「佐倉地名研究会長」として実った。

誰にでも歴史や民俗を親しく語り、当会の地域研究活動ではいつもロマンを展開し、浮世絵にも関心をもち、あふれる筆力で「史談八千代」によく発表された。

上山さんの本業は「さえら印刷商会」という印刷屋さんであった。当会の機関誌「史談八千代」は何冊か印刷の労をわずらわし、大変お世話になった。

生涯学習を堪能され、豊かな人生をおくられた上山さん、天国でもベレー帽のきまった姿で楽しく語ってください。ご冥福をお祈りします。

＝編集後記＝

お二人の訃報に接し、私が入会した二十年前、先輩の上山さん宅をお訪ねして、そのサロン（店舗兼書斎）に並ぶ古代史や民俗学の書籍に胸が高鳴ったこと、また15年前、平野さんの米寿を祝う旅を企画し、那須国造碑など氏に故郷の史跡をご案内いただいたことなど、昨日のここのように思い出します。

皆様からの追悼投稿に感謝し、お二人方のご冥福をお祈りいたします。

蔵由美 sawarabi-y@nifty.com